

博物館都市巡り③

ヴェネツィア（イタリア）

高橋 哲雄

「学芸員」付きの都市

博物館になぞらえられる歴史的都市は数多いが、なかでもヴェネツィアは、ある特別な一点で極めつきの存在といえる。

というのは、こうだ。博物館の価値は、もちろん一義的には所蔵する資料の質と量にかかるとは、それとは別に学芸員の役割も大きいのではないかと私はかねがね思っている。すぐれた学芸員がいて、彼（彼女）の見識と奮闘のおかげで人のその博物館を見る眼が変わった、いや館自体も変わった——それを特色とし誇りとする、そんな博物館があってもいいのではないか。

同じことが都市についてもいえるはずだ。ある都市の魅力にとりつかれて、街の隅々まで知りつくし、そのよさを人に伝えようとする「ボランティア学芸員」が現われてもおかしくない。ジョイスのダブ

リン、ディッケンズのロンドン、ユゴーのパリ、ヴァザーリのフィレンツェ。いや、フィレンツェなら今ではマアリ・マッカーシーかな。この連載第一回で紹介したエディンバラにも、R・L・ステイヴンソンという傑出した語り部が付いていた（Edinburgh: A Picturesque Note, 1878）。彼らの眼を通してみると、都市はときに思わぬ輝きをみせたり、「発見」の悦びを与えてくれる。

ただ、そうした語り手の多くは作家文人であった。なるほど彼らの観察眼は確かだ、ジョイスの場合など、『ユリシーズ』を手に今日のダブリンを歩いても、十分ガイドブックの用をなすといわれる。ステイヴンソンにいたっては、何しろ『宝島』の作者、地図の旅はお手のものであった。とはいえ、彼らは、建築家・画家でもあるヴァザーリをやや例外として、言葉の忠実な意味での「学芸員」ではなかった。

「資料」である建造物や彫刻、絵画を実測し、材質や工法を調べ、模写・スケッチし、由来、様式を探り、修復・保存の方法を論じ、一切合財を記録に残す、といった作業を、プロでもないのにこなして行ける人がそうザラにいるわけではない。

ところが、そういう人物が、ヴェネツィアについては現われた。一九世紀イギリスの大美術評論家であり社会思想家のジョン・ラスキン（一八一九—一九〇〇）がその人であり、彼の残したこの博物館都市の研究が名著『ヴェネツィアの石』（一八五二—五三）である。この本は、ラスキンの多くの本がそうであるように、強烈なキャンペインの書でもあり、人びとのこの街を見る眼を変えただけでなく、それを通じてこの街をも変えた。いくつもの文化遺産を荒廃から救ったのである。

ラスキン家の旅

ラスキンは早熟な、天才肌の学者だった。世に出たのは二四歳のときで、不遇の画家ターナーを擁護する『現代画家論』第一巻（一八四三）を引上げてさっそうと登場し、短かい間に圧倒的な成功を収め、並ぶ者のない影響力のある美術評論家となった。クエンティン・ペルは彼を「美術批評を一流の散文形式にした最初のイギリス人」と称え、「我々の祖先たちは、汽車の便を探すのに鉄道旅行案内を開くように、美術にかんしてはラスキンを頼りにした」と述べている。

『建築の七つの灯』（一八四九）と、それにつづく前記『ヴェネツィ

アの石』によって、ラスキンの声価は決定的なものとなる。彼が若くして成功した秘訣は、天性の文章のうまさや別とすれば、時間をかけた観察と記録の習慣と綿密なスケッチの膨大な集積にあった。それを可能にしたのはラスキン家のユニークな旅のスタイルである。

ラスキンの父は芸術と旅を愛するシェリー酒商人で、商用を兼ねての旅にも妻と独りっ子の息子をしばしば同行させた。息子の成長について商用抜きの、息子のための「研究旅行」が増え、積もりつもってラスキンは八〇年の生涯の半分の時間を旅に費やした。「半分」というのは単なる喩えではない。一回の旅は数か月だが、二年近くに及ぶこともあった。ラスキン家のもっとも愛好したコースはフランス・スイス・イタリアで、ヴェネツィアとシャモニーにかなりの日数を割くのがふうであった。ヴェネツィアに滞在したのは十一回、多くは数週間だが、三回は長期にわたり、九か月、十か月に及ぶこともあった。

幼少期のラスキンは地質学や気象、博物学に熱中した「理科少年」で、行く先々で岩石や草花の標本を採集・分類し、写生し、記録をとったが、絵画や建築に打ち込むようになって、その習慣は変らなかつた。まだ中産階級のツーリズムが本格化していない時代で、貴族や大商人、学者の旅がいわば「人に会うための旅」で、ファッショナブルなりゾートや首都、大都市を主な滞在地としたのに対して、ラスキン家の旅は徹底した「物を見るための旅」であって、そうしたところは注意深く避けられた。その代り、いっどんなところにも立ち止まらずに作業ができるように、馬車は必ず自家用を使ったのである。

こうして少年学者を中心とした、このスコットランド出身のプロテスタント一家のいかにも禁欲的な研究旅行は、実に効率的に膨大な数の研究資料を築き上げることになった。いい複製のない、そして写真の不完全な時代にあつて、これは、そうした「資料」の蓄積のない批評家に比べると、断然たる強味であつて、それによって若いラスキンは論敵を圧することができたのである。

ラスキンのヴェネツィア

ではラスキンの眼に映つた一九世紀半ばのヴェネツィアはいかなる博物館都市であつたか。

彼のヴェネツィア訪問は一六歳の一八三五年にはじまり、六九歳の一八八八年に終るが、重要な滞在は初めての両親と離れての二六歳の旅と、それにつづく三〇歳から三六歳にかけての『ヴェネツィアの石』を書き上げるための長期滞在、それに恋人ローズを失つたあとの五七歳から五八歳にかけての、やはり長い滞在ということにならう。

二〇代後半からの数年間は彼の建築への関心が高まり、彼の美学にあらたな開眼のあつた時期に当たる。ピサ、ルッカのロマネスク建築やティントレットの絵画に啓示を受けたのもこのときであつた。

当時、海上帝国ヴェネツィアの最盛期は遠い過去となり、経済的・政治的にはもちろん、文化的にも衰亡の色が濃かつた。全盛期の富が生んだビザンチン・ロマネスクやロンバルディア・ロマネスク、そしてヴェネシアン・ゴシック、さらにはルネッサンス期からバロックの

豪奢・華麗な建造物群も、経済的困難、ナポレオン戦争や対オーストリア戦争などの相次ぐ戦乱、文化的無関心、修復にかんする無知などから、荒廢の淵に立たされていた。しかも、荒廢は急速に進行していた。

ラスキンは胸をつかれる思いで、それらの記録にとりかかった。一八四九年から五二年にかけては彼の滞在は二回、延べ四二一日にわたるものだったが、彼は黒いフロックコートに身をかためてゴンドラに乗り込み、運河沿いのかつての貴族・豪商の館の窓に曲芸師のようにしがみついては、窓のアーチの寸法や角度を測り、手帖に書き込んだ。そうしたすべてが『ヴェネツィアの石』と『実例集』に投入されたのである。

ただラスキンの建築史観はかなり特異なもので、宗教建築と世俗建築とを問わず、最高の理想は中世のゴシック建築、それも一三世紀末からの一世紀余りに最高の達成を見たとする。キリスト教の信仰と無名の職人の自由な創意の発露が花開いたのがその時代だからで、以後は宗教心の衰退とルネッサンス人の「知的驕り」によって墮落への道をひたすら辿つて行く。他方、ゴシック以前のギリシャ、ローマの建築はゴシックの精神性には欠けるが、「自然」などところがよく、その模倣であるルネッサンスや新古典主義とは区別すべきである。ビザンチンやロマネスク建築も、ゴシックには及ばぬが、それなりに讚嘆に値する幾多の建造物を生み出している——というのである。

廢墟の幻想

ラスキンのテーゼはヴェネツィアには当てはめにくい。ヴェネシアン・ゴシックの精華である統領政庁をはじめとする贅をこらしたパラッツォ（館）群にキリスト教的精神性を結びつけるには無理がある。ロマネスクの位置づけもわかりにくい。また知的驕りから墮落した一六世紀ルネッサンス人というが、彼がもっとも深い啓示を受けたティントレットは一六世紀後半に活躍したれっきとしたルネッサンス人であり、のちに彼がこよなく愛するようになったカルパッチョも初期ルネッサンス期に仕事をした人である。絵画と建築とでは別の原理が支配したというのだろうか。

ラスキンはヴェネツィアの未来に悲観的であった。『ヴェネツィアの石』というタイトルも「廢墟のなかで書かれた歴史」という意味だと、のちの「旅行者版」でみずから解説し、そこでの「終章」には「墓の街並み」という題が付けられた。長い滞在の終わりに近づいた一八五二年六月の友人への手紙には「いっそヴェネツィア全体が廢墟になり、サン・マルコ広場が雑草に蔽われ、統領政庁に蔦がからまるような日が来るのが待ち遠しい」と投げやりになっている。

それにもかかわらず、ラスキンの影響力は絶大であった。彼の保存キャンペーンがなければ、トルチェッロやムラーノの宝玉のような教会群はもろろん、サン・マルコ大聖堂でさえ、破壊は免れえなかったといわれる。

ヴェネツィアはあまりに偉大な過去を背負い込んでいるだけに、廢墟のイメージ（潜在的な恐れ的心象化）が避けられないのだろうか。

ファブリーツィオ・クレリーリチというシュール・レアリスムの画家に「水なきヴェネツィア」という作品があって、干潟と化した潟の上に長い杭がむき出しに林立し、その上に廢墟となった建物群ののっかっている。アーチ橋の残骸が空中にかかり、前景の砂地にはゴンドラの残骸が半ば埋もれている。

これは今も高潮（アクア・アルタ）に悩むヴェネツィアへのアイロニーなのであろう。だが、イメージを反転させて、そこに水を張りさえすれば、そっくり水中博物館都市に生れ変わるわけでもある、と私は白昼に夢見る人になる。

ヴェネツィアは沈みゆく都である。工業用水の汲み上げ規制で地盤沈下のペースは落ちてきたが、現在でも年二センチは沈んでいると聞く。高潮でサン・マルコ広場が水浸しになり、板の上を歩く情景は、今や初冬の風物詩になっている。

これに温暖化の影響を加えるなら、あと二、三百年もたたぬうちにヴェネツィアはすっぽり水中に没して竜宮城のごとき存在になるかもしれない。水中では太陽や風から保護されて街はいっそう美しく蘇えるかもしれない。観光客はゴンドラや水上バスに代ってガラス張りの潜航艇に乗り込み、もとの大運河沿いの建造物群を、あるいは二〇世紀当時の水面から、あるいはもっと高い位置からのぞき込むことができる。リアルト橋もアカデミア橋も、往きは橋の下を潜り、帰りはアー

チの上を越えて航行するなんてことになるかもしれない。映画「旅情」でキャサリン・ヘプバーンが宿をとった小運河沿いのプチ・ホテルのバルコニーにじかに出入りしたり、いやもつとでっかい夢をというなら、統領政庁の大ホールの壮麗を極めた大天井を飾るヴェロネーゼの画面を、画家が描いたのと同じ至近距離からディテールを楽しむなんてツアーも可能かもしれない。私は、映画「イングリッシュ・ペイシェント」で、ジュリエット・ピノシュ扮する従軍看護婦が、彼女に心を寄せる地雷処理班のインド兵から、フィレンツェ郊外の無人の館で受けとったこの上ないプレゼントのシーンを思い浮かべている。彼女はザイルで空中に吊り上げられ、発煙筒の照明を手に、すばらしいフレスコ画の大壁面を文字通り手に取るように楽しませてもらったのである。

ラスキンの不幸

つい余計な夢ばなしに身が入ってしまった。それにしても、ラスキンはなぜこうもヴェネツィアに魅せられたのであろうか。

あるところでは自分は「ヴェネツィアの育て子」だと言うかと思うと、「ヴェネツィアは虚しい誘惑で、真の教師はルーアンとジュネーブ（シャモニーを含む）だった」と言ったりもしている。ヴェネツィアはたしかにヨーロッパの都市でも別格に美の成分を濃厚に含んでいる街だが、その成分には悪徳すれすれの悦楽の要素が多分に混入していることは、ヴェネツィアと言えはすぐに連想されるいくつかの顔ぶ

れ——カサノヴァ、バイロン、ワグナー、トマス・マン——からも想像に難くない。ところがそれは、わがラスキンには遠く、忌むしい世界であった。その彼がなぜヴェネツィアに？ ここで彼の生い立ちの、もう一つの側面を振り返ってみなければならぬ。

ラスキンの両親はスコットランド出身で敬虔な福音主義教会に属し、彼を高位の聖職者にしたいと望んでいた。母親のしつけはきびしく、泣いたり反抗したりすれば鞭打たれた。玩具は一切与えられず、遊び友達もつくれず、古典書を友とした。十二歳になるまでに聖書は六回通読、ほとんどを暗誦することができた（これは彼の文体を作るうえで非常な力になる）。ラスキンがオクスフォード大学の学寮に入ったとき、母は近くに部屋を借りて毎日ラスキンとティータイムをとみにした。つまり彼は、ある伝記作家のいうように「母カンガルーの袋の中に聖書と一緒に入れられていた」のである。

このマザコン神童の破局は遠くなかった。彼は二九歳で両親のお気に入りスコットランド生まれの少女エフィーと結婚するが、妻と性生活を営むことができず、五年後に結婚生活の不成就を妻から訴えられて、結婚は解消する。エフィーはすでに、ラスキンが世に出した流行画家ジョン・エヴァレット・ミラーと深い仲にあり、一年後二人は正式に結婚する。

この屈辱的な事件の三年あと、三九歳のラスキンは今度は十歳の少女ローズ・ラ・トゥーシュと知り合い、恋に落ちる。たまたま同じ年に彼はトリノの教会でのある体験から信仰を捨てていた。彼にとって

神からの離脱は、神との三頭支配を形成する父と母との別れを意味するものでもあった。この「自立」が「少女愛」というかたちをとらざるをえなかったのは、晩年のラスキンの悲劇だった。ローズの母はアイルランドの銀行家の妻で小説などにも手を染め、知的魅力を自任する女性だった。崇拜する大知識人ラスキンの関心が、自分の機知に富んだ会話ではなく、娘の愛らしさに注がれているのを知り、愕然とし、おそらく嫉妬にかられた。二人の交際は断続的に禁止されては許され、二人とも神経をズタズタにされた。ローズ十八歳の誕生日にラスキンが求婚すると、ローズの母はエフィーに手紙を書いて、結婚の実態を問い合わせ、エフィーはラスキンは異常だと答え、それが事態を決定的にした。一八七五年にローズは二七歳で髄膜炎で亡くなり、翌年ラスキンはヴェローナで部屋着のまま街をさまよう、といった狂気の最初の徴候をみせる。

その年傷心のラスキンは最後の長い冬をヴェネツィアですごした。アカデミア美術館で初期ルネッサンスの画家カルパッチョの聖女ウルスラ連作とめぐりあい、ウルスラの面さしに生前のローズを見出して、模写に通いつめ、霊界からの彼女のメッセージを待つ。プロテスタントの信仰を捨ててからの彼は、降霊術に凝りはじめていたのである。そして不思議なことが起る。クリスマス・イブに在ロンドンの友人からミルトの標本（ウルスラの絵に出てくる植物で、天上の愛を象徴）が、クリスマスの日には匿名のアイルランド人女性からダイアンサス（ナデシコ的一种で、地上の愛を象徴）が、送られてきたのである。これぞ

ローズからのメッセージと、ラスキンがいかに狂喜したことか。霧に包まれた街を彼はいつまでもさまよい歩いたという。

母なるヴェネツィア

こうしてラスキンにとってヴェネツィアは癒しの街となった。聖女ウルスラをつうじての霊界の恋人との交信の場となったのである。

しかしヴェネツィアはラスキンにとってずっと〈母〉を象徴する街だったのではないかと私は思う。若き日のラスキンにとってヴェネツィアは母同様至上の存在で、ほとんど批判の対象たりえず、その魔力にひたすら身を委ねておけばよかった。『ヴェネツィアの石』でキリスト教精神を土台とする文明史観を展開しはじめた頃から、ヴェネツィアは絶対ではなく、墮落した部分のヴェネツィア——ルネッサンス以後の——にラスキンは幻滅を感じるようになった。千年間も堅持した共和制を、ナポレオンやオーストリアの支配の下に失った現状、それも輝かしい過去の文化遺産を、建築史についての何の見識もないままに破壊と荒廃に任せているヴェネツィアは、愛と嫌悪の二律背反的な感情の対象とならざるをえなかった。

そのアンピバレンツはまた母に対する思いにも重なる。ラスキンの信仰喪失と前後して両親、とくに強い母とのあつれきは次第に深まり、母と顔を合わせたくないばかりに海外に出掛けることが多くなる。しかし、ヴェネツィアには出掛けない。五二年に『ヴェネツィアの石』執筆のための旅をすませたあと、なぜか二〇年近くもヴェネツィアへ

は足を向けなかった。その間六四年に父が、七一年に母が亡くなるが、その頃からヴェネツィアへの旅を再開する。そして最後の大きな旅であった七六年の旅の終りに、友人への手紙で次のような意味深い言葉を残す。「以前はヴェネツィアでの一刻一刻が歓びだった。今は、当然のように、死んだ母の肖像画を手がけている」と。彼はこの都に、現実の母にはない母なるものを托していたのでもあろうか。

プルーストのばあい

『ヴェネツィアの石』第二巻の補遺に「われらの救いなる聖母」という興味深い小エッセイがある。それは、サン・マルコ小広場から大運河越しに正面にそそりたつサンタ・マリア・デッラ・サルUTE（救いの聖母）教会とその向うのジュデッカ運河を隔てた場末の島に立つ、はるかに小さく貧弱なレデントーレ（救世主）教会とを比べて、イタリア人の心に占めるマドンナとキリストの重要さの相対関係がわかるという趣旨のものである。彼はいう。「イタリア人はなにかにつけて、大きな悩みごとはずべて彼女のところに持ち込もうとし、何かあるたびに、大きな捧げ物を彼女のもとに届けたがるのだ」と。

「聖母」を「母」に、「イタリア人」をラスキン自身に置きかえれば、そのまま自己の心情を語ったような件りだが、これはラスキンだけのことではなかった。この聖母の街のとりこになった著名な文人は他にも多い。マルセル・プルースト（一八七二—一九二二）はその一人である。

プルーストはラスキンの深い影響下にあった人だ。と同時に、ラスキンと同じかそれ以上に、母との膺の緒が切れなかった人でもあった。その両面がヴェネツィアを舞台に交差する。

プルーストは富裕で教養豊かなパリの中産階級の家庭に生まれた。父は高名な医学者。母はユダヤ人金融業者の娘で、深い文学的素養があった。ところがプルーストは生来病弱で神経質、喘息の持病があった。ある意味ではもともと自立しにくい条件がそろっていたわけで、才能の方向がつかめぬままに三十近くまで定職もなく、社交界に出入りしては悶々と無為の生活を送っていた。

そうした彼に力と自信を与えたのがラスキンの著作である。プルーストは、自分は想像力に欠けると思い込んでいたものだから、芸術家は想像力など持つべきではない、自然の語るまま、その秘密の重要な部分を写しとる写字生に徹すべきだというラスキンの教えに、大きな慰めを見出した。偉大な作家の使命と義務は翻訳家のそれだという考えに共鳴した。そこからさらに、自発的隷属状態は自由のはじまりであり、自分で感じていることを意識できるようにするには、先達が感じとったものを自分で追体験するにしくはないという「影響理論」（ジャン・イヴ・タディエ）をつくり上げた。独創は徹底した模倣から始まる、というわけである。

こうして彼は一八九九年からラスキンの著作の翻訳、紹介、注解、批評に力を傾けるとともに、「偉大な人の眼で世界を見たい」という思いから、フランス国内のルーアン、アミアンにはじまるラスキン巡

礼を開始した。そして一九〇〇年一月にラスキンが八一歳の高齢で他界すると、それに触発されたかのように二九歳のブルーストは、五月、ラスキンの愛するゴシックが最高の達成をみせたヴェネツィアに出掛ける。病弱な自分は余命いくばくもないという想いがあって、どうしても死ぬ前に、崩壊寸前とはいえ、なおバラ色に映えて立つ幾多の館の傍に行き、そこに中世の住宅建築についてのラスキンの着想が宿っているのを、この手で触れ、この眼で確かめたいと思ったからであった。三週間余りを費やして、ブルーストはラスキンの行跡を巡りつくす。この徹底したラスキンへの傾倒こそがラスキンを卒業し、作家としての自立を生むのに必要な体験であった。ヴェネツィア行きはいわば卒業実習だったのである。

嘆きの母

この自立の過程で重要な役割を果たしたのが、ブルーストの母ジャンヌである。この母子関係も、ラスキン母子に劣らず並み外れたものだった。

彼女はまず、英語の不得意なブルーストのためにラスキンの翻訳を助けた。『アミアンの聖堂』の第一稿は彼女が作ったもので、ブルーストはそれに手を入れ注解を加えた。ジャンヌはまた、独りでは旅もできないマルセルをヴェネツィアにも連れていった。

しかし、ジャンヌはラスキンの母のように「強い母」ではなかった。ラスキン夫人はロンドンからサレルノ（南イタリア）まで馬車の中で

一度もクッションに倚りかからず、背筋を伸ばしたままだったという逸話のある人だった。熱い紅茶のポットに手を伸ばす幼児ラスキンをけっして止めるな、と乳母に言い渡す母でもあった。

それからすると、ブルースト母子の結びつきははるかに甘美だったといえる。十三、四歳のマルセルは、友達との英語での質問ごっこで答える。「あなたにとつての悲惨さとは？——母から引き離されること」。この母子は息子が三十をすぎても、離れているときは、ときに日に二、三通も手紙をやりとりしていた。こういう度外れた関係は、ひとつにはブルーストが生まれつき喘息持ちで、母はその原因は自分にあると思いついて自分を責めつづけ、息子は病気を利用して母に優しくしてもらおうとしたことから生まれた。

マルセルは定職にもつかず、社交界の軽薄才子として品行なパラサイト暮らしをつづける。同性愛の疑いも母を苦しめた。それらはすべて母に振り向いてもらうための行動だったかもしれない。ヴェネツィアでも母子の間でいさかきがあったらしい。理由は不明だが、このソドムの園でマルセルが母を心配させるような行動をとったという見方が多い。それは反面、彼に罪悪感を抱かせた。ラスキンと同様、彼もカルパッチョの聖女ウルスラ連作に魅入られたが、ラスキンが聖女ウルスラに恋人ローズの面影を見出したのに対して、ブルーストは聖女ウルスラの葬儀でひとり悲しむ黒衣の女性像に母のイメージを重ねた。それは嘆きの母であった。ヴェネツィアはブルーストにとつても、まことにアンビバレントな母との関係のなから、少しずつ自立

へのきっかけを用意してくれた街なのである。しかし、真の自立は、ヴェネツィア行きの五年後の母の死を待たねばならなかった。

ミュッセとサンド

それにしても、どうしてもこうもヴェネツィアにはマザコン息子たちが寄ってくるのか——そう思いたくもなるもう一組のカップルが、この街を舞台に派手な情景を演じてみせた。一八三三年、ラスキンが初めてヴェネツィアを訪ねる二年前のことで、主人公は二三歳の詩人アルフレッド・ミュッセ（一八一〇—五七）、お相手は六歳年上で離婚歴のある男装の女性作家ジョルジュ・サンド（一八〇四—七六）であった。パリの社交界で知り合って恋に落ちた二人は、イタリアで新生活を羽ばたかせようとパリを発った。計画を樹てたのはサンド、反対するミュッセの母を説き伏せたのもサンド、費用を出した（出版社からの前借り）のもサンドであった。彼女はミュッセの母親役をも勤めねばならなかった。

しかし、ヴェネツィアに着くとたちまち二人の間には争いがはじまった。熱病で苦しんでいるサンドをよそに、ミュッセは女遊びに出かけたのである。彼はひとりのわがままな子供であって、うっとうしい病人の傍での退屈な時間に耐えることができなかった。サンドは回復してから、ホテルの滞在費を捻出するため執筆に励み、ミュッセにも仕事をすすめるが、彼は指図されるにがまんならなかった。そもそもサンドの方が有名人でちやほやされるのが気に入らなかったの

である。ただ、サンドが母性だけの女性ではないことを彼は知るべきだった。ミュッセが重病にかかると、今度はサンドが、その治療に当たったプレイボーイのイタリア人医師と深い仲になり、ミュッセとの、彼ら自身が認める「近親相姦のような」関係は、破局へと向う。彼は〈母〉をヴェネツィアに奪われたのである。

ミュッセとサンドにこれ以上付き合う必要はあるまい。ただ、この修羅場を潜り抜けることで、ミュッセは脱幼児化した。才気のひらめきだけでもはやされてきた、むら気な詩人は、自己の内面と向い合う『世紀児の告白』の作家に変身したのである。

ラスキンの宿

こう書き綴っているうちに、ラスキン流の思い込みが乗り移ってでもくるのか、この海の都が母と子との愛憎の物語の舞台となったことが、自然に納得できる心持になってくる。

三好達治のおしゃれな小さい詩に「海よ、僕らの使う文字では、お前の中に母がいる。そして母よ、仏蘭西人の言葉では、あなたの中に海がある」という一節がある。フランス語の母は*mere*、海は*mer*であり、もひとつ蛇足を付け加えるなら、イタリア語では母は*madre*、海は*mare*だった。海に守られ、車の入らぬ、夜も安全なこの街を、聖母の名がむやみに付いた数多の教会、小路、広場、小運河にぶつかりながら歩いていると、一種胎内回帰めいた気分にとらえられることがある。その中で少年たちは自立へのイニシエーションを遂げるので

あろう。プルーストもミュッセもそうであった。

彼らと比べるなら、ラスキンは生涯天才少年のままだったといっておかしくない。いわば「卒業」を知らぬ人だった。非常な勉強家で絶えず成長しながら、生半可な成熟を拒否するところがあつた。聖女ウルスラに癒しを求めた時も、ひたすら模写と調査の作業をつうじての癒しであつた。その虚心の探究が現在のアカデミア美術館の聖女ウルスラ連作の配置に生かされている。

こうした手弁当学芸員暮しの間に、ラスキンが父から受け継いだ莫大な財産はみごとに費い尽された。セント・ジョージ・ギルドというユートピア計画、ロンドンのスラム改良事業、オクスフォードの絵画学校設立といった、それなりにまっとうな性質のものもあれば、いかがわしい人物に施しを委ねての、無駄なばらまきも少なくなつた。

そのツケが回ってきて、ヴェネツィアの滞在費も切り詰めねばならなくなる。はじめは高名なホテル・ダニエリが常宿だつた。ここはミュッセとサンドの宿でもあり、おそらくプルーストも泊つた（ここがホテル・エウローパか、またはその両方かについては議論がある）。塩野七生さんも、ここに泊るには何かきつかけが必要だつたという高級ホテルで、ロビーの中庭柱廊がみごとである。もとは貴族のパラッツォで、表側の部屋はラスキンの好きなヴェネシアン・ゴシックの窓飾りにふちどられている。

一七七六年にはグリッティに移る。やはりぜいたくなパラッツォ・



貧しくなったラスキンの宿。2階正面の角部屋。白い銘板が見える。

ホテルで、大運河に面した続き部屋をとるが、途中から裏側の狭い部屋に移らざるをえなくなつた。それでもやりくりがつかなくなつて、最後の三か月余りは、風景としては大味なジュデッカ運河に面した昔の筏場にある小さなペンションに移る。観光コースから外れたラ・カ

ルチーナというこの宿は、今ではイギリス人旅行者の間で人気があり、一年先でも予約がとりにくい。ラスキンのブラック（記念の銘板）があるのはヴェネツィアではここだけなのだが、ダニエリでもグリッティでもなく、この小さな宿にそれがあるというそのことが、彼への何よりのオマージュとなった、と私は思う。ラスキンの人柄にふさわしいからだ。彼は世俗的には愚かだったかもしれないし、思想面でもときに独断的で、晩年には錯乱が進んだ。にもかかわらず、彼の偉大さは疑うべくもない。

クエンティン・ベルは、七〇歳に近づいたラスキンが若い美術生と交わした無分別で情熱的なラブレターを読みながら、ある種の畏怖と感嘆の念を抑えることができなかった、という。「ラスキンは老いた愚か者だったかもしれない。しかし、彼は堂々とした振舞いをする愚か者だった」というのである。そして、愚か者でなければできぬ仕事、この世にはある。

今日われわれのみるヴェネツィアが、百数十年前にラスキンの眼に映った同じ街と比べて、悪くなったか、いくぶんましになったかの判断は、専門家でもむづかしいだろう。けれども一つ確実にいえることは、この愚かな一人の志願学芸員がいなければ、取り返しのつかぬ破壊が進んでいたであろうことだ。息子が高位の聖職者になることを願いつづけていた彼の母は、美の世界の守護聖人となったラスキンを、霊界からどうみていただろうか。